

遅い春

小野 友貴枝

〈2020・1・23〉

東日本大震災9年目、2つの戒めを心に

東日本大震災は2011年3月11日（金）晴れく午後2時46分 M9・0（震度7）の地震発生とそれによる津波によって、死者15897人、行方不明者2533人もの大被害を受けた。

その1 私たちはあの日を生涯忘れることはない

今年は大震災が起きてから9年目、いつもの年であれば、政府主催や被災自治体の追悼式が行われるはずだったのに、この2月から3月に掛けて、世界中を騒がせている新型コロナウイルスの感染拡大を受け、どのような規模の追悼式でも開催することが難しく、見送られてしまった。

しかし、私は、東日本大震災を忘れることができず、テレビ、新聞などの報道に関心を寄せて、周りの人と、追悼、哀心の気持ち共有した。

その中で、「祈りの海」と題した毎日新聞（3月12日夕刊）に載せられた「慰霊之塔」の記事を読み、ひとしおこのような惨事は絶対に起きませぬように、と祈ったものであった。この祈りは、私なりに、不甲斐無いものであった。

なぜかという、私は、過去5年間、毎年3月、震災の強かった三陸海岸へ、「震災地ツアー」に参加していたからだ。

被災地の直後を見ているので、その後の復興状況、現状を見て、そして復興への寄付をしてきている。今年、三陸鉄道の全線開通を祝って、全線とは言えないが乗りたいと思っていた矢先、（3月22日開通）これもコロナ災害で、当分お預けになるかもしれない。

私は3月14日、テレビでNHKスペシャルの午後9時から9時49分『奇跡の子と呼ばれて―釜石震災9年』ドキュメントを観た。この内容は、「釜石の奇跡」と言われ、震災からの避難が成功した、幼・小・中の

子供達3000人の物語である。その時、実際に遭遇し避難した、中学生の女性が9年経った今の思いを綴っている。女性は「釜石震災学習館」に勤める傍わら、追憶と被災者への哀悼を捧げるドキュメントであった。9年経って初めて振り返られる、心の軌跡、展望が考え深かった。女性は、助かったからと言っても震災の傷は深く、友を失った喪失感は一生涯忘れられないだろうと語っている。

その2 子どもたちへの鎮魂

遡って2011年4月29日に被災者の49日法要がおこなわれた。その中で、眼を曳くのは、大川小学校の子どもの遺影である。「84の笑顔・天国へ」とタイトルが付いていた。私は、「子どもたちの鎮魂」と言いたい。小学生が、笑顔でいるわけが無い。何という酷いことだろう、さぞかし苦しかっただろう、「おかあさん助けて」と絶叫したろう。しかし、その声は一瞬でかき消され、カバンを背負ったまま波間に消えてしまった。

最近、吉村昭著（2004年）、「三陸海岸大津波」（文春文庫）を読んだ。この中の「子供の眼」に小學校生徒の作文が載っている。昭和8年の記録であるから、まだ生存者はたくさんいるはずだ。

本によれば、三陸海岸地方はいつ大津波がおきてもおかしくない地勢であり、過去（明治29年、昭和8年）の記録を丁寧にとめている。その最後に、これからの被災は、経験を生かし、津波を怖れる行動をすれば、歴史に残るような惨事は免れると記してある。

しかし、その忠告が2011年3月11日には当て嵌められなかった。人々は地震と津波の到来の関係を、過小評価してしまっていたのであろうか。

なぜ津波を甘く見ていたのであろうか。まして多くの児童を預かる学校において、子どもが逃げる場所を確保しておかないこと。また訓練していない無防備さが明らかにあった。

子どもは、自分で判断することはできない、先生を信じて付いていったはずだ。的確な行動であったなら、被災は免れていたはずだ、子供たちへの鎮魂を、私たちは歴史に残さなければならぬ。私は、大川小学校の記事を読むたびに「許せない」と、言う言葉が口から洩れる。誰を、許せないのか、誰に怒っているのか解らないが、ただ許せないのだ。

先生を信じて、指示通り付いていっただろう、そこでの事故が、全滅になったのだ、ということは先生の行動指針を後追いする義務があると思う。それを記録

として残し、全国の教育者にも参考になるようでないといけない、曖昧なままこの惨事を見過ごしてはいけない、と改めて、吉村昭の小説の中から学んで欲しかった。

そして、大川小学校事件(被災)の判決が確定した。

2019年10月11日、東日本大震災の津波で84人の児童らが犠牲になった宮城県石巻市立大川小学校の裁判で、学校や市の教育委員会の防災対策の不備を明確に認めた判決が確定した。仙台高裁は昨年4月、石巻市と宮城県に約14億円の賠償を命じた。市と県は、上告していたものも、最高裁が退ける決定を出した。子供の安全を確保すべき義務がある学校側に、防災上の重い責任を課した判断だった。

各地の学校や教育委員会は防災対策の早急な見直しを迫られる。判決は、校長らが事前の情報収集で津波を予想できたと指摘し、危機管理マニュアルに具体的に避難先や経路を記していれば被害は防げたと結論付けた。(毎日新聞2019年10月12日掲載)。市教委についても、マニュアルの是正指導を怠ったことから賠償責任を負うと判断されたのであった。

〈2020年3月14日〉

「平穩」に慣れ過ぎた保健所の感染症対策

いつもなら3月という月は、空を仰ぎたくなるほど春先を感じるのに、町がシーンとして、温かみも感じない。いつもなら鶯が、庭の先藪から聴こえるのだが、その声さえ聞こえてこない、子供の声もしない。アレっと一瞬思ったが、そうか世の中はコロナウイルス緊急処置として小中高の休校に入ったのだと思いついた。

だから町から子供の声が聞こえないはずだ。子供たちは、家にもつて何をしているのだろうか、と感傷的になった。大きな恐竜でも襲ってくるのではないかと、小学生は意味もわからず怯えているのだろう。いや、知っているものか、とスマホゲームに興じているかもしれない。

学校の臨時休業は、国に権限がない、学校保健安全法にいう学校設置者(自治体)の権限である。だが政府は、新型インフルエンザ等対策特別措置法改正案が成立・施行後に、外出自粛要請などの「私権制限」を伴う緊急事態宣言の発令が可能になったと、いうことである。

政府は、新型コロナウイルス拡大に伴って、日本が後手後手になっていった感染症対策に国の面目を掛けて、躍起になっている。

私は、その中で一番問題だった感染症対策の最重要課題、感染の有無を調べる検査の遅れを取り上げたかった。これは、多くの人々が言っていた事柄で、私が初めてではないが、保健所で働いた人でなければ言えないこともある。遅れの要因に、任務軽視による「保健所の後退があった」と。その要因としては、感染症の前線で働いてきた、保健所の「防疫対策にリーダーシップが取れなかった」と言いたい。

この意味は、地域に一番密着している感染症対策のベテラン職員のリーダーシップの検査機能、相談機能の遅れである。その原因は何か。保健所の対策が主体的に、そしてフルに活動していなかった。保健所の機能として一番大切なものは、「検査室」だと教わってきた。優秀な検査技師や医師、薬剤師、獣医師、保健師、細菌学に秀でた技師などがひしめくほど居て、検査室を支えてきた。その人たちのおかげでエイズも梅毒も、そして結核も、または最近ならO157も減少し壊滅してきた実績がある。それなのに、都道府県行政は、経済難に出会うたびに、このセクションを減ら

してきた。

都道府県の事業費・人件費予算削減のあたりがすべてこのような防疫対策を劣化させてきているのが全国の保健所、今の姿である。もっとも致命傷なのは、保健所の減少だ。全国の保健所の設置数を見てみると、1993年が848カ所、その10年後が576カ所である。

これは、財政難だけでなく、民間委託という時代の要請で、保健所機能の後退を、さも正論のように横行したこともあるが、この要因は単純ではない。

しかし、現場で働いてきた私、保健師から見れば、保健所の存在を貶めている。故に公衆衛生で働く医師が辞めていってしまった。医師の不足は、保健所の活動に大きな打撃になっている。医師でなければ所長になれないという、保健所法の縛りがあって、所長の兼務、または、保健所長の老化が目立ってきた。

そして、保健所長兼務する保健所が多くなって緊急対応が出来難くなった。いつでも、いかなる時でも、感染症対策はできる、という機能の充実を図れるつもりであるが、いつのまにか、保健所自体が縮小されて支所ばかりでは、いざという時の体制ができなくなった、という現実である。

さてこの新型コロナの感染の有無を調べる検査機能を増やすために、3月6日、保健所から地方衛生研究所（地衛研）へ搬入されていたものを、保険適応が始まったことで病院等の専門外来の医師の判断で民間検査施設に依頼できるようになった。このことで1日4千件（今までは800件）の検査ができるという。

そしてこの期に「平穩ボケ」していた保健所機能も、「備えあれば憂いなし」という感染症から市民を守る近代施設になつて欲しい。

ここであえて言うが、私は過去に、「保健所法」を改正した立役者である。保健所長が「医師」と限定されていた時に、医師の確保に困窮した県では保健所長を兼務にして補つてきている。それでは保健所の役割が担えないと、保健所長の限定医師を緩和して、その他の項目、保健所の業務、経験豊かな技術職を当てることという条文を作った。だから獣医師、薬剤師、検査技師、保健師でも所長になれる「条文」ができていた。

（2020年2月22日）

愛を詠う、不倫小説が書けない

最近、話題をさらっているのが俳優（男女）たちの密会、不倫である。小説家にとって、この不倫騒動は、知りたい反面、恐ろしい情報である。

今はやりの文春号砲というネーミングまで付いて、かなり世の中を騒がしている。週刊文春の売れ行きも抜群で、これこそ、この誌面に載せられたカップルは、うちもさつちもいかないほど叩かれる。実写付きで暴露されたネタで、マスコミ、ワイドショー、広告そしてフアンのお悪まで影響してくる。

市民はスターのコキおろしに参加し、まるで犯罪でも起こしたかのように騒ぎまくる。少し前までは、有名税と諦めていたようだが、今はそうはいかない、まるで犯罪者まがいの扱いだ。このたび、マスコミを賑わかしている、東出昌大や喜多村緑郎の不倫暴露は、二人ともに前歴があるせいだ、大事件扱いである。

最近までは、妻が有名でなければそれほど騒がなければ、問題視されなかったが、しかし、最近、フェミニズム時代になって女性主義、市民感情が入り、敵

になる。男の一方的な「浮気」は、時代錯誤になってきた。本来から、男女の平等社会をやってきているのだから、愛の不平等、夫だけが許されることなど有り得なかつたが、日本的な未成熟さが幸いして、流してきた傾向がある。

しかし、今の世は男の不倫に対して成熟しているかという議論ではない、今は別の意味で、もつといびつである、夫の不始末でありながら、世の中が買つて出て、不倫を成敗する。このネタを、商売にしていたり、個々人のストレス解消にしているという現実も、またいびつである。

不倫は、夫婦、家族の問題であつて、社会が知つたからと言って、大騒ぎ、または、視聴率に加担する問題ではない、あくまでも犯罪ではないことを、視聴者などは、自覚しなければいけない。が、不倫騒動は、マスコミ、インターネットで炎上して消えていかない。時がたてばという、手段があれば、当事者は、膨大な違約金を払つて、時がたつまでマスコミから姿を消すほかないのだろう。こんな中で、男女の恋愛を書いていた小説家は、途方に暮れる。中年の愛を書くことは、市民が怖くてできない。森瑤子や直木賞作家夫婦、藤田宣永・小池真理子らの愛を扱つた小説は、好きだつ

た。これらもほとんど、不倫である。いうなれば不倫という関係はドラマ向きである。

中年の恋の対象者が双方ともに未婚であつたならば、このストーリーは面白くも何ともない、なんら障害もなく、恋愛を全うできるから。

さて、ここで、私は愛をテーマにする小説に、不倫を書こうとした時、某編集者から助言をいただいたので、その項目を守っている。「不倫を書いてもいいが、未成年の女性を対象にしない。女性も男性と同じように成熟していること、そして経済的にも自立していること、そして未成年の子供を育てていないことを守るように」と言われた。

さらに、「不倫している男女にペナルティを与えること。例えば、離婚、死亡、病氣、失業など、地位を失うこともありかな」と言うように、ペナルティをつければ、読者は、読み進むであろうと、助言された。それらを守りながら、私は私なりに、男女相互への「思いやり」を大切に、それもモチーフにするから、作品の結末は、ハッピーエンドにならない。

日本で一番先に不倫を書いたのは夏目漱石の「それから」だと言われる。友人の妻に恋するこの小説は、創作を志す人なら誰でも読むであろう名作である。

私は、創作を志した時から、男女の「愛」を書いてきた、その作品群の中で僭越ながら自己推薦を3題上げると1位「那珂川募情」・2位「秘恋・竹取物語」(叢文社) 3位「愛の輪郭」(日本文学館)がある。さて、今も私は、不倫のテーマで書きたい作品はあるが、何しろ、世の中がギスギスしているせいとか、怖くって書けない。文学文化にまで、不倫は不道德だという縛りを課すということはどうか、ちよつと行きすぎではないか、と言いたい。

〈2020年2月11日〉

文芸同人誌の未来を改めて問う

私が編集人で44号まで発行してきた「秦野文学同人会『風恋洞』」は、2年前、休眠したままである。最後の号は、私とLの2人になってしまった。そして作家のLが、高齢者で療養中のため、作品が仕上がらないという、情けない状態になった。70枚程度の原稿ならば、まだまだ書ける私は、1人でも頑張るつもりでいたが、しかし一人というのも心細く、今は縁あって、東京・江東区にある「群系」という評論中心の同

人誌に入れさせて貰っている。

そんな状況の中、私は、文学同人誌「風恋洞」を運営してきた経験から、地域発の同人誌の役割、そして未来ってなんだろう、と考えてみた。未来などという大層なことを考えているわけではなく、今までやってきた文芸同人誌は何を担ってきたのだろうか、自問する。地域における文化のパロメーターの一つに、文芸同人誌結成の有無があると言われ、信じてきた。が、しかし、ここでひどく落ち込むことの一つに、文芸同人誌は、地域の文学振興を本当に高めることができたろうか、という問題である。とても地域文学に影響してきたとは思えないのだ。

見渡してみると私の周りには文学を愛する同人誌仲間がたくさんいる。その仲間の作品、同人誌が文学界に、どう影響してきているかと問うとノーに近い。同人が頑張って書いて発表してきた作品が読者、評論家の眼に止まることも少ない。そして、ほどほどの文学賞にも受賞することも少ない、と言うことは、文学界の流れに乗れない作風や作品であるということ、口惜しいが知らなければならぬ。

同人誌に載せた作品は受賞することを狙っているわけではない、とうそぶくが、それは負け惜しみで、本

当は受賞に値するような作品を書きたいから日夜励んでいるのではないだろうか。評価して貰いたいから、同人誌をマスコミや学者、そして出版社に送っているのではないだろうか。そうでなければ、一生懸命作品をまとめ、仲間を集って同人誌を発行しないのではないだろうか。しかし、600誌以上ある同人仲間が、文学を愛好し、真面目に作品に取り組んでいるながら日本の文学に貢献できないのはなぜなのか、ここで振り返ってみる。

○同人誌に長く書いていても作品が上手になっっているとは限らない。上手くなるために「一生懸命書いている」のになぜ、上手くならないのだ、自分だけでなく、仲間も数をこなしながらつづけている割には上手くならない、ということは何故なんだろう。

(疑問) これは個人の問題なのか、同人仲間の問題なのか。

○読者に読んで貰いたいと思って書いているのに、読者がつかない。なぜ、同人誌は読者の獲得ができないのだろう。

(疑問) 一般の読者を引っ張る作品少ない、なぜなのだ、読者を意識して書いていないのはなぜか。

○作品にエネルギーがない、だんだん常識的に流れる作品ばかりになってしまふ。なぜ、創作の活力やオリジナリティが消えてしまふのだろう。

(疑問) かえって新しい時代のセンスを勝ち取れなくなって常識的な、誰にでも好かれる作品が多くなる、なぜか。

○同人誌を発刊して、その後、合評会を持ち仲間内で意見交換をする。多くしてこの合評会に、リーダーがいらないのは何故なんだろう。

(疑問) 編集・評論家という専門家を呼ばない、ドングリのせいくらべて、同好会、趣味のレベルの評価になって、リーダーを育てることを厭う傾向があるのはなぜか。

○文学という広い視野で、文学の専門ジャンルで活躍する業界、または評論家たちは、地域で活動している同人誌作品を、なぜ文学の資源として評価しないのだろう。

(疑問) 同人誌を送っても、読む価値がないと見捨てられている。同人誌の作品を推薦、評価するシステムがないから当然である。まとめとして地方色豊かな同人誌は残っていくかもしれないが、卓越したりリーダーは育てられない同人誌はいつまでたっても作

家の養成地にはならない。だからみんな、寄り集まって十人十色の意見を言い合っている同好会から脱出しないし期待もされない、このままで文学界に打って出る未来はない、ということを変更して考える。

（2020年1月23日）

「がん」末期を独りで、と選んだ親友

新年に入って「彼女を書いておかなければ」というあせりの言葉を毎日呟きながら、一月は、もうすでに20日が過ぎていくが、新しい作品に入れていない。12月までに構想を練つてあるのに、まだ足踏みしている。この怠惰な毎日、何で書けないのだろう、私は、6、70枚の創作を書く集中力や、意気ごみが無くなっているのだろうか、それとも老いが忍び寄っているのだろうか、と不安になる。

新しい作品は、「看護学校時代の親友のがん闘病記」である。親友のFさんは、がんの末期を迎えるに、古里の山梨、猿橋町（生家の地）の*猿橋の近くに帰って、ラスト生活を決行した。今はやりの「ホスピス」である。居室は、ナースステーションの2階の1室。ここ

で、独り自給自足の生活をした。自分でプランニングした生活は、家族に迷惑を掛けたくないで、面会謝絶（夫は週1回）、既婚の子供たち（2男1女）とはまったく会わない。もちろん友人、親類縁者とも絶交という孤立した生活を求めた。彼女が独りで末期がんの療養を選んだには理由がある。彼女は、7年前から入退院を繰り返していた。

初発のがんは「卵巣がん」で、手術をしたが、転移で広がっていた。発見が遅れたと言つても、がんの治療は進んでいて、治癒できそうだったが、残念ながら、転移した腹膜がんは治療困難になっていた。彼女は7年間の闘病生活と、世話になった家族にピリオドを打つと決心して独りでの生活を断行した。

彼女は、定年まで川崎の県立高校の看護教諭をやり遂げ、夫も地方公務員として、定年後再雇用で働き65歳で退職している。この時期、夫婦とも元気なら、川崎市で生活し続けたであろうが、彼女の望みでもある故郷、猿橋への移住を選んでいる。

そこで地域の人たちと交流し、楽しい余生を送るつもりでいたが、不幸にしてがんの再々発で治療を余儀なくされた。ここでも根治することなく、彼女は最後の手段として「ホスピスケア」を求めた。

この時彼女は、「充分にお世話になった。もう長くないだろうから、誰にも迷惑を掛けたくない、延命処置も受けず、誰にも世話にならず、独りで死んでいきたい」という強い決断を実行した。

その中でたった一つ願うことは、外とのつながり、親友とのメール交換をしたい、というささやかな希望であった。その相手に選ばれたのが看護学院時代からずっと交友のあった友達Nと私である。私は無二の親友ではなかったが、創作者として「話題が多い」という、彼女からのたつての希望であった。

確かに私は、長年日記も書き続けたという実績もあり、メール交換者に向いているかもしれない、と私は喜んでこの役を受けた。それだけでなく、彼女は長年、私の著作の愛読者でもあった。彼女に選ばれた私とNは、彼女が亡くなるまで毎日メールを送り続けた。そして、ほぼ七カ月、彼女の命が終わる2日前までの記録が、私の手元に残っている。

最近、一周忌で彼女の墓を詣でる機会を得た時、彼女の声を聞いた。「小野さん、私を早く書いてよ、私が古里で晩年を迎えた、この記録は小野さんの手元にあるでしょう。貴女が私の生き証人。だから私が選んだの、メール交換した内容を創作してよ」と彼女の声

が墓の中から低く、それでいてはつきり聞こえてきた。「書くよ、あなたの終末の言葉は、貴女の生きた証よね、私の筆で書いてみるわ」と、無意識に返事していた。私はやっと勇氣が出てきた。この墓での会話が確かならば、書かないわけにはいかない。

彼女が生まれ育った猿橋町。母の生家の傍に家を建て、そこで余生を送ろうとしながらも、その望みは病気のために半ば挫折した悔しさ。不治の病氣と闘った、彼女の声を書き残してあげなければ、と、氣を引きしめて、パソコンに向かっていく日々である。が、どうした訳か指が進まない。手法は、フィクションで描くつもりだが、彼女が立ちあがって来ない、どう書けばいいのだろうか、友を書くのは難しい。

* (注) 日本三奇橋の一つ猿橋とは、大月市猿橋町の桂川に架かる刎橋。国の名勝に指定されている。

〈2020年1月9日〉

オリンピックイヤー (Olympic year)

東京オリンピック1964年から、TOKYOオリンピック2020年へ、記念すべき令和2年が明けた。

日本中が聖火に熱狂した56年前。そしてこの夏、ついに2度目のオリンピックが開幕する。こんな見出しが令和2年1月1日、多くの新聞の1面を飾った。

スポーツ系でない私でも、昨年からのスポーツ記事を丹念に読む。次々とオリンピック選手の候補争いが主流になっていく新聞の見出しに目を凝らし、日本選手を応援してしまう。日本びいきの応援のせいかな、最近、世界的なタイトルを持つ選手が登場する。スポーツは、一朝一夕に、選手になれるわけでもないのに、まるでオリンピックキヤーに合わせたかのように素晴らしいタイトル保持者が現れる。

どんなスポーツでもタイトル保持者になるには、小さいときからの練習や両親の熱心なスポーツ教育の元で育ち、海外への渡航経験を持つコーチ、等々と恵まれた環境がなければ、才能は伸びないと、言われている。

そのような環境に育った選手がここ数年、いろんなジャンルの中からでてきて、国際感覚に溢れた彩りで、紙面で賑わしている。

日本がスポーツ大国だと自負したことはないのに、選ばれた選手が次々と出てくるから不思議だ。水泳・体操・卓球・柔道・ラクビー・バスケット・テニス・

バトミントン、など続々と優秀な選手がでてくる。

昨年は、ラクビーWカップで国中熱くなった。日本選手の逞しき、体力、知力での圧勝に、ラグビー熱が一挙に高まったと言っても過言でない。

それ以前、私は池戸潤作の「ノーサイドゲーム」を素晴らしいドラマとして堪能し、読書、またはテレビで見えていただけで、ラクビーに興味をもったわけではないのに、日本チームが勝ち進むうちにすっかりファンになってしまった。

そして世界ランキング6位を獲得した時には、過去には関心すら持たなかった自分を恥じた。しかし、それは、まだテレビの中だけのことで球技の激しさ、ルールの奥深さにまで魅せられてはいなかった。が、今は試合の中で最後に知るの「心意気」だとまで言われると、その日本らしさに、また魅力を感じ、ぜひオリンピックで上位を勝ち取って欲しいと願ってしまう。

明けて、オリンピックキヤーの2020年、スポーツ紙の一面は、箱根駅伝である。東京から箱根往復は、大学生という未来を担う青年の団体戦でもあり、これがスポーツ意識をたぎるほど夢中になって、2、3日を過ごした。青学大が2年ぶり5回目の総合優勝。その記録、10時間45分23秒は、昨年の東海大が出した

大会記録の6分45秒も更新したという、スピードアップへの挑戦である。

スポーツ界の記録更新というトライは昨年から、すべてのジャンルで謳われる。「進化する陸上競技」などと、スポーツ界では命題になっている。今はカンガールと同じように100メートルを10秒切った走者が出てきている、信じられない進化を見せてくれるオリンピックになるだろう。そしてやがては、チーターのように走る(100メートル5秒?)という日が来るのではないだろうか、と空想する。今年で、TOKEYOオリンピック開催は2回目になる、このトライは、国際的に意義があるのかどうか、開催数で世界を見てみると、2回の開催国は、パリ、ロサンゼルス、ヘルシンキがある。3回以上の開催国は、ロンドン4回、アテネ3回である。

第32回TOKEYO夏季オリンピックの開催日程は2020年7月24日から8月9日まで。参加国及び人数は、205カ国、約1200人とされる。歴史に残る祭典であることを、期待している。

(2019年12月17日)

「菅又狐穴見聞録余話―大坪家の人々―」 著者大坪正

令和元年11月、「菅又狐穴見聞余話―大坪家の人々―」(編集協力・朝日新聞)を大坪正が出版した。



大坪正は、私たち兄弟9人の末弟(四男、昭和23年生)である。ちなみに大坪姓は1836年、茂木藩の役所から「苗字御免」を頂いている(栃木県芳賀郡茂木町下菅又)。この時から「大坪家」の歴史は、延々と続き、記録として残っている。これら古文書等は、二階建ての石蔵に保存されていた。正が、整理し、分

遅い春

類した範囲は1109点ある（一番古い文書は1660年）。

正が、古文書に関心をもったのは、長兄が墓石に刻んだ墓誌を読んだことが契機になっている。「大坪家の先祖について不明の点が多いが出来る限り調査し歴代のみ茲に墓誌として供養する 昭和59年3月 大坪行男建立」と書かれ、13代前までの当主名が記載されている。「菅又狐穴見聞余話―大坪家の人々―」（315頁）の書き出し「はじめに」にはこのように書いてある。――誰でも一度ぐらいは「自分はいったい誰、なぜ自分はここにいるのか」なんてことを思うだろう。自我確立の過程の中で、自分を深く見つめ、悩んだりしながら成長する。この思いに急かされて、地方公務員（東京都）を定年退職した正は、「大坪家の人びと」と称した家系誌を、自分の生きがいとしてまとめる作業に入った。その歴史は200年前まで遡り、その間の系図に載った大坪家は5代、50人の総勢になる。

農業・林業を営んできた大坪家は、古文書によると、永禄元年（1558年）に「百姓菅菅又村在」とある。450年以上も前のことで、戸主は市之介という。辺境であつただろうこの地に入り、田畑を開墾してきたのだと想像する。検地が実施された万治三年の田畑之

高も残っている。

大坪家の明治時代の地券証や、大正4年頃に書かれた不動産一覧によれば、大坪家の畑は一町五反、山林は四十町歩ほどのこと。多くの子孫たちが嫁ぎ、分家した時に田んぼや畑、山林を分けてきた。戦前戦後、小作制度や農地の改革があり、そうした経過をたどりつつも、現在まで豪農として引き継がれてきた。

「あとがき」にも記されているが、かつて、この菅又狐穴地域には大勢の人々が暮らしていた。文化元（1804年）の人別御開帳では「二十二、馬五疋」との記録がある。

正が子供時代の昭和30年頃、お年寄りや子供を含めて30人ぐらい住んでいた。今は10人前後で、私を知っている人はみんなあちら側に逝ってしまい、その子供たちの多くはこの地域から出て行ってしまった。

田畑や山林、そして先祖の墓を守ることも難しい時代になり、時の流れは無常だ。これから先、菅又狐穴地域はどのように変わっていくだろうか。

長兄が、3年前に亡くなり、今現在農業の跡継ぎがなく、大坪家の田畑や山林は、竹林に侵食されつつある。

蛇足ではあるが、最後に大坪家から嫁いだひとを母

とする、父の従兄の寺門七郎が昭和30年9月に「大坪家の人びと」を出版した。その本の中に、大坪家は、興味ある家系で、名文章家が出るのではないかと明言している。

その言葉を借りれば、この「菅又狐穴見聞余話」に載せてある、長姉、歌人「萩原きしの」、そして創作をライフワークにする私「小野友貴枝」などが、その一端を担っている。

そして、ここで5年の年月を費やしてまとめた大坪家の歴史、業績「菅又狐穴見聞余話―大坪家の人々―」の集大成を発行した「大坪正」に感謝する。これは、大坪家から巣立った多くの親族のバイブルになるに違いない。また、家の歴史、家族をまとめる人たちへの参考文献になると、自負さえしている。

〈2019年12月2日〉

偉そうに、お買いものはキャッシュレスで

頭髪が真っ白になってきたせいか、初めて会う人に「おばあちゃん」と声を掛けられる。「エッ、誰のことを言っているのだろう」と周りを見るが、私だけ

誰もいない。もつと、ひどい人では、スーパーマーケットのレジ、並んでいる人の後ろで、順番を待っていると、「おばさん、向こうが空いているよ」と示される。その向こうとは、セルフサービスコーナー。ナビゲーターに沿って、お金を払い、買ったものを自分の手で袋に入れる。もたもたしているおばあちゃんは、レジの列から追い出され、何でも、自分でやる時代になった。

コーヒーを飲みたくて、マックに行くと、ここでもせつかれているような気がする。決して声では届かないが、足踏みで分かる、だから、若い人で混む時間帯には行かない。ATMも同じだ、後ろで舌打ちしている、何という忙しい時代、スピーディーにことを運ばないとほじき出される。

せつかちな民族になった。最近では、動きだけでない、買いものを現金で払おうとして、財布を覗いていると、こちらもせつかれる。確かに現金は、1円の端まで払おうとするから時間がかかる。高齢者は、出来るだけキャッシュで買い物したいと思うが、しかし、そんなことを言っていられない時代が来ている。

もう若いサラリーマンはクレジットカードを出さなくとも、すべてスマホで、買い物を済ませている。何

かマジックを見ているような感じだ、それで、レジコナーをサッサ、サッサと通過する。この10月から、クレジットカードで買い物をする、ポイントが付く、還元率の高いものが多いので、誰でもカードを利用する。だから現金で支払っている人など、ほとんど見ない。

それでもスマホを使えるから私はいいが、使えない同世代の、現役高齢者がいっぱいいる。彼等はガラ系の携帯に固守し、大かた通信だけでできればいいと言って努力する意気込みがない、いわゆる危機管理ができていないのだ。

彼等を含め私たちまで、キャッシュレスの時代が来ると言われてはいたが、こんなに早く進んでいるとは思ってみなかった。もう既に外国旅行は、ほとんど現金を扱ってくれない、と言われている。これから、高齢者は、現金以外での買い物はどうすればいいのだろうか。かなり広範囲に使えるクレジットカードを持たされて、それで買えるものをかろうじてするとしても、取引銀行の預金、経営感覚が少ないから、いつも心配でカードでの買い物は億劫になる。

今よりもっともつと声を小さくして、生きていかなければならない。自分の手で、銀行の預金までいじ

れなくなった人のことを聞くと、すべてにわたって高齢者は買い物ができない難民になる。

何もかも若い人に頼むほか生きられなくなる、しかし、彼等は高齢者に向って、「だから、もつと若い時にスマホを覚えとけばいいと言ったではないか」と説教する人が増える。カード音痴、スマホ音痴の年寄り、10数年前のパソコン難民と同じように、世の中の情報、電子ネットからおいてきぼりにされる。さてここで言いたかったのは、若い人からいつも聞く、嫌になる言葉遣いがある、「偉そうに教える」言い方だ。本当に、偉そうに教わらなければ何にも出来ない高齢者の多いこと。高齢者はなお生きづらくなる。

今はどこに行ってもスマホ、タブレットで遊んでいる「子どもばかり」だ。世の中がコンピューター一色になる時代はそう遠くない。さて私たちはどう生きるのだろうか。世の中の片隅で、若い人に「おばあちゃん、買いたいものは、現金じゃ、駄目だよ」言われ、ウロウロする時代が、そこに来ているのだ。若い人に偉そうに言われたくなければ、インターネット時代に挑戦する、バイタリティーを養おうじゃありませんか、人生90年を生きなければならぬのだから、あきらめず今日からでも頑張りましょう。

（2019年11月15日）

書いて生きる道に「根性がある」を貫徹へ

自著「高円寺の家」（文芸社）を出したあと、しばらく元気がなかった。創作も限界かな、という「心穴」を掘って鬱々としていた。その時、これが最後ではさびしすぎる、という声が聞こえてきて、文芸同人誌「群系」43号の原稿に入ると、前のように手が動き（パノコン）、「金魚の縁」という創作がで上がった。

これは、「貸家物語」というシリーズものパートⅡ。

先回は「猫を侮るな」という、シビアな内容の作品を書いている。これからも家で飼う動物になぞらえて、「貸家物語」を書く予定だ。

例えば、「犬」「亀」「二十日ネズミ」「文鳥」などをイメージしている。動物の主題から、人間関係まで発展する話のつながりが面白い。私は満足している。これらは、落語の登場人物「八つつあん、熊さん」の世界だ。

貸家では、なぜか動物を飼うことを一般的に制限されている。それは動物が家を汚し、壊したりするからだろうが、今は動物が人間を慰めるといふ存在性が高

まっているので、やたらなことでは禁ずることはできない。それだけの覚悟がなければ賃貸業は成り立たない、と思っている。

ここで、私はまったく別の話題を拾う。それは、最近のことであるが、自分の生きがいを支える創作活動に、疑問を持つてしまった。

とくに言えることとして、いつまで、創作にこだわっているのだ、多くの時間を費やす創作が、無益に思えてならない。もっと手短かに、効率のいい執筆活動という要求に駆られる。

また、ここで手法を変えて、エッセイや人生の生き方（指南書）や評伝などに方向転換してはと言われる。そうすれば、時間にも心に余裕が出るのではないかと、言うアドバイスも頂く。しかしである。私が創作から足を洗って、自叙伝や認知症の夫を支える「How to」ものを書いて、新鮮さはないし、何よりも自分で満足しない。

確かに「How to」ならいものなら、人生長く生きてるので、書けないことはない。私らしさでは「女のリーダーシップ」（仮称）といったものなら、すぐにも書けそうだ。

例えば、「神奈川ゆかりの女性たち第Ⅲ集 かなが

わの112人」（神奈川県新聞社刊）というリストを見ていると、なんと多くの実力者がいるものだと感心する。私などそのメンバーの末席にも入らないほど、業績を残していない。

世間には、業績、履歴のある人がいっぱいいて、彼女たちこそ指南書を書けば読者が付くであろう。私では駄目だ。まず、他人が尊敬してくれるほどの学歴がないし、それを表す業績もない。すると、何で勝負するのだと、また初めに戻ってしまう。自分が好きなものしか表現しようがない。

それは、この20年やってきた、創作だ。その下地は単純で、「小説好き」という好みに突きあたる。小説好きが小説を書いている。これが一番自分を動かしているものだ。この軸を動かす訳にはいかない。

「小説好きが小説を書く」、いい眺めである。80歳にしてこんなことを言っている。小学4年生の時読んだ世界名作全集が忘れられない。「アンクル・トムの小屋」「少公子」「レ・ミゼラブル」等がある。後半の人生を生きるには、創作しかない決めて続けた。それで、「得手に帆をあげる」ことはできなかった。が、しかしこれで終わりたくない、残す人生に「根性」で向かって行こうと思う。淑女にならなくてもい

い、野心を持つて生きる、強気の方が身に合っている。「書くものがあるうちは、書いて出版する」これに尽きる。強気になって、なんぼの世界だ。自分のお金で出版し、自分のお金で広告出しているのだ、何にも引け目を感じる必要はない。人生はもう長くないぞーと唸っている私。最終ランドを「根性がある人」で行こうと、決心を新たにした。

〈2019年11月5日〉

大臣の不適切な言葉について

2019年9月11日に、内閣改造があり、大臣が就任した。そこで就任した大臣2人が発言した言葉で、「国民に不快な思いをさせた」と言って、謝罪している。その一人、萩生田光一文科科学相がBSフジ（10月24日）で「自分の身の丈に合わせて勝負してもらえれば」などと発言。これは英語民間試験に関し、早急な導入に対して、受験生の立場が平等でない、とする疑義に対する回答でも用いた言葉である。

また防衛大臣に就任した河野太郎防衛大臣は自身の政治資金パーティで「私は雨男、防衛大臣に就任して

から3回も台風が来た」と所信を述べた。この2人の大臣が発言した「身の丈」と「雨男」という言葉は、発言または挨拶で述べる言葉ではない。双方共、普段使われている話し言葉である。それをわきまえずに、大臣が登壇して発言してしまったから国民が不協和音を鳴らし、撤回を求める行動に出たのは当然である。

後から述べた河野太郎防衛大臣の言葉は、台風（15号、19号、そして21号）の被害、大勢の死者、川の氾濫において多くの財産を失った被害、これに立ち向かっている人々は、絶望感、苦しみを味わっているのだ。それなのに担当大臣が高見から、人ごとのように挨拶をすれば、国民は傷付き、詫びられても許せないという気持ちである。

先の萩生田文科相の発言は、大変由々しき問題で、受験する学生たちの経済・地域格差から起こるであろう課題に対策を講じることもなく「身の丈にあった」などという無神経な言葉を投げかけたのだから、国民は怒っても当然である。

英語民間試験の導入はこれまでも準備不足を懸念する声があった中で2020年度の導入であるから、この言葉の差別感だけでなく、高校現場からも見直しの声が上ががり、押し迫ったこの時期「白紙」に戻らざるを得なくなつた（11月1日）。世相を揺るがしたこの発言は、ここで終止符を打つことにはなつたが、実施の準備をしていた現場は大変迷惑を被つたとも新聞紙上、マスコミでは報じている。この早急の取り組みは、何としても「羽生田文科相を守るため」とする一連の動きであることも、国民の多くは知っている。

私たちは、今までも数限りなく報道されてきた国会議員の「不適切な発言」の真意は別にして、も思うことは、言葉に対する「語学力の低さ、勉強不足」からくる結果だと思つている。普段から言葉の適正さに精通してないから不注意に出してしまうのだ。これらに実力をつけるには、国語の力が必要で、発言と話す言葉の違いを、学んでいるかどうかではないかと考える。

そして言葉の多様性を駆使できるのは、読書量とに正比例していると思つている。言葉が持つ意味の深さ、多様性は小説を読んだ人には叶わないとさえ思っているが、身びいきでしょうか。

この時期、何を申そう、読書週間である。（10月27日から11月9日まで）ぜひ国会議員の先生、多くのリーダーの皆様、忙しいでしょうが本をたくさん読んでください。小説など役に立たないと思つているでしょうが、箇条書きの報告書よりもずっと言葉に強くなり

ます。

今、台風被害、幼児教育、高齢者福祉などで多くの予算を必要としている時期、大臣の発言で多大な国費を無駄にしないように切に願います。

（2019年10月1日）

新刊「高円寺の家」周辺の感想から、癒す想い

「小野友貴枝著「高円寺の家」（文芸社）。夫婦間の暴力を、現代社会に提起。そして夫の暴力がなぜなくなるらないのか？」

表題作のほか問題作『小田急沿線』」



なぜか、「高円寺の家」（文芸社）の評判が知人、友人に今ひとつである。9月半ばから仲間にも数冊送っているが、テーマのせいか、それとも内容のせいか、評判が良くない。

一年に2冊も出版するという頻繁さを批判されているのであろうか、重いテーマばかりと言われたことに傷付いた。感想を電話してくれる友人も平気で、「あなたの作品はテーマが重いからいやだ」とまだ読みもしないうちから、平気でペチャankoになるようなことを言ってくる。「読んでそう思ったの」と、こちらも暗くならないように努力しながら、言い返した。その後、私は私で、自分の作品を思い起こすも、詰まらぬい所ばかり浮かんできて自信がなくなる。

そこで問題は、本を寄贈することにあるのではないかと突きあたる。相手に無理に読ませているから、または、感想を言いたくない人にまで人情で引つ張ったから、「通俗的」「堅い」と突き放されてしまうのではないかと、邪推する。結局、高額な自費出版は、内に受賞作という客観的な評価が得られないから、読者との距離が近すぎるのだろう。その上、文学同人誌仲間の内では隠れた嫉妬心が絡むのであろう。

「だから云わないこっちゃない。本を送っちゃだめな

んだ、パンフレットを送ればいい」という声がある。読みたい人は買つてでも読む。他の商品から比べても本は決して高くない、菓子箱一つの値段だ。

作品の評価の手紙など頂くと振るいあがる。無理な注文ばかりだ。まずストーリーの筋を批判する。筋は、作者の基本的な能力で、それがよくなければ読んでいただく価値がない。本の感想も冷静に聞きたいのに、著者のプライドというのか、拒否反応が強く耳に、目に入つて来ない。ここで悪く言われなくても、たしかな友情感まで危うくなる。自分のこの一連の心情を冷静に分析すると、いわゆる本の出版は、子どもを産んだみたいなの心情的な、だから子供が貶されたような、「口惜しさ」を味わうのだ。

という日が続いたので、岩手県盛岡市の友達（こちらは歌人、この春歌集を初出版した）に誘われて、八幡平の紅葉と温泉に行った。丁度紅葉もよく、「藤七」温泉は、まだ露天風呂渡りも可能な暖かさで、潤沢な硫黄温泉につかつてきた、もちろん2泊の中では読書三昧、パソコンから離れることができた。ここで読んだ本を紹介したくなった。持つて行った本は、遙洋子著「東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ」ちくま文庫（2000）、宮口幸治著「ケーキの切れない非行少年た

ち」新潮新書（2019）と石川啄木「一握の砂・悲しき玩具」新潮文庫（1952）である。

これら3冊は、私の今の心境にピッタリで、中でも「東大で」は、心よいほど、私をアクタイプにくれる、何が何でも、私は、フェミニストが大好きで、どうしたら自分の意見が言えるようになるだろうと、そればかり勉強してきているから。しかし、この3冊の中で、強い衝撃を受けたのは「ケーキ」である。この作品が今ベストセラーになっている。と毎日新聞が報じているとおり、真正面から青少年犯罪に取り組んでいて読み応えがあった。重要なテーマを扱っているながら、タイトルがオリジナルのせい、ヒット、ランキング1位だと聞けば、うれしくなる。日本の一般読者がまだ信じられる。私は、よくぞここまで書いてくれたかと熱を入れて周りの人々に勧めている。最後の「一握の」石川啄木の歌とその人生に心を寄せて、枕元で読んだ。

啄木のその時代の歌を拾うと、「高きより飛びおりるとき心もてこの一生を終るすべなきか」に共感した。23歳の啄木は、短歌で名をなしながらも食べてゆけず、小説で収入を得たいと、本気で思った時期があつたようだ。

が、新聞小説も含め、数冊の本すべて売れなかった。そして28歳で人生を閉じるまで貧乏に苦しむのである。島崎藤村のように長生きして、経済的なバックがあれば、作家になっていたかもしれない、と私は想像を膨らませ、盛岡時代の啄木に親しんで、発刊の心労を癒した。

〈2019年9月19日〉

隠れ家庭内暴力を「高円寺の家」で描く

「新刊「高円寺の家」(文芸社)のPR。パンフレット」



「予期せず夫の暴力に伏したとき、妻は何を守ればいいのだろう『家族って何?そして人生って何?』立ち往生する日々を世に問う、ストーリー2題」。

これは、「高円寺の家」の発行に際して創ったパンフレット用の、キャッチコピーである。(写真)

ストーリー2題とは、前回のブログで紹介したとおり、「高円寺の家」と「小田急沿線」である。「小田急沿線」は「高円寺の家」と違って、この二年間で書き下ろしたものである。かなり切実感のある家庭内暴力を扱って、小説の背景をあえて秦野市内、小田原市近郊にしているので、見ようによれば、私小説っぽい、決して私小説ではない。

ここで、私としては、いいキャッチコピーができたが大満足している。

いつもならこのキャッチコピーの後に、私らしく「いいでしょう、本の内容がずばり、今問題になっている家庭内暴力、子どもの虐待、発達障害が浮かぶでしょう」と自慢げに言いたかったが、今回の出版については、周りの人にもほとんど宣伝していない。

なぜなら、高齢者・引きこもり・子供の虐待など、ナーバスで創作し難い、さらに地域に類似した事案があるといけないので、内容を外にださないように気を

遣う必要があった。

ただ、地域の小説仲間には、同胞として、先ほどのキヤツチコピーを、声高に宣ってしまっただころ、直批判を受けた。

彼らの言った言葉をそのまま書いてみると、

「『高円寺の家』の、キヤツチコピーも出来たよ、今の時代を突くストレートな表現になった」と迷いもなくいう私の高揚した電話に、「あなたが表現したい気持ちは解る、でも厳しい皮相的だ、前回の『社協を問う』もみんな読めなかつたと言っている、もつと誰でも読めるものを書いたら、家庭内暴力をストーリーにするのは難しすぎる」

そして、彼らから「本はいらない」という返事。私の高揚感は、とたんにダウンした。私は何で電話をしたのか忘れるぐらい、本を出版した私の挑戦が閉鎖されたような気がしたのだった。

かなり傷付いた私だが、立て直して、「私は、高齢でしょ、創作期間もあとわずか、だからテーマがしっかりしているものでなければ書く気がしない。そして出版する経費も嵩む。だから、それは、テーマは世に問うもの、どの本も心血注いだものしか世に出したくないの、それは私でしか書けないものを残したいの」

と言いつつする必要もないのに私は説明していた。

さらに、日ごろから感じている出版界の欲求不満まで口にしていった。

「私は、尊敬している有吉佐和子のような作品を残して死にたいの、彼女は世に問うものを『華岡青州の妻』から始まって、世の中の先取りした問題『複合汚染』や『恍惚の人』に少しでも私は近付きたいの。今読めなくても7年後には、そうだねと読んでくれるような作品を残したいの」と。

「それでは、暑いからお気をつけて。『高円寺の家』は送らなくてもいいのね」と、やっと悔しい気持ちを立て直して、いつもの声で締めた。

しかし、心は煮えたぎるほど怒りが沸騰していた。今回の本は、2月に「社協を問う」を出版したばかりで、立て続けの出版は、仲間の羨望を煽ったのかもしれない。

さらに、軽妙なテーマばかり追う今の創作界に疑問を持つている仲間は、私の良き理解者であると、家族にも自慢してさえたのに、電話の内容、出版への意気込みは仲間の言葉でダメージを受けた。

さて、パンフレットも出来たので、私は、「高円寺の家」を、小田急沿線の市町村の図書館と横浜、川崎、

都心の中央図書館に、著者取り分の70冊から45冊送った。手書きの送り状とパンフレットを入れて、360円のレターパックで、これに要したお金と時間も半端じゃない。本の自費出版は、出版した後の整理が大変、いつものことだが、軽い鬱になる。

本来なら関係者や友人にも送らなければならぬが、前出しのように内容がシビアだからと断られたので、このほうは節約できて助かった。図書館に送っておけば、新聞へ広告出しても安心。図書館で手に取ってもらえる。町中に本屋が無くなって、いたく困るのは高齢の読者だ。本をべらべら捲って初めて買うかどうか決める読者論も叫びたい。今回は内容から、3大新聞に小さな広告を打つ予定。そのころには出版後の私の鬱は、直っているだろう。

2019年8月6日

小説「高円寺の家」の初校を終えて

私は、次の作品「高円寺の家」を「株式会社文芸社」で出版する準備を進めている。この作品は、3年前、秦野市文学同人誌「風恋洞」第42号に掲載し、比較的

好評を得たので、出版しておこうと思ったもの。テーマは、杉並区高円寺の旧家の長男、高校教師と、見合いで結ばれた高校図書司書、麗子のストーリーである。彼女の視点で書くことにした。

その結婚生活は、2人の子供が社会に巣立った後、家族が夫婦だけになった頃から、言われもない夫の暴力に悩まされ、一方的抑圧に生活が脅かされるようになった。

夫婦とも定年を迎える頃、結婚生活を継続する気力が無くなった麗子は、離婚を考えるようになった。

そんな折、出勤途中の電車の中で、偶然、同郷の元恋人と再会する。彼は、吉祥寺から通勤していることを知ったが、麗子は、再々会を約束することもなく別れる。さらにこれも偶然と言えば偶然、故郷の小山市に新設された大学の情報科に常勤教師として働いてほしいと要請される。その年の3月に定年を迎えていた麗子は、夫との別居のチャンスと受け入れ、准教授という好待遇を呑む。

やっと、自分は何をやったのか見えてきて、一方的に夫と別居、高円寺の生活を捨てて小山市に転居する。

独りになって再出発した麗子のもとに、元恋人が訪

ねてくる。彼は、幼馴染の彼女の生活を支える役割が自分にあると、思川のほとりにある彼の旧家を、彼女の拠点として提供する。

さて、出版するには「高円寺の家」1作では物足りないという、出版社側の要請もあり、もう1作、未発表の「小田急沿線」を追加することになった。

「小田急沿線」は小田急の沿いの田園地帯に棲む、旧家の三世代家族、その長男に嫁いだ直子のストーリーである。保健師のライセンスで働く公務員の直子は、共働きを結婚の条件にするほど、結婚生活に甘い夢を持つこともなく働き続ける。子供3人の育児、姑の介護をクリアしながら家を守って生活してきたのはいいが、思いがけなく落とし穴があった。

実生活における夫の仕事中心の生活は、顧みれば対人関係の偏狭さにも繋がっていた。その上整理できないだけでなく、多量の蔵書癖と写真家のようなカメラのコレクション癖はバランスを欠き、家庭生活まで脅かすようになっていた。

その頃、医学、保健分野でも、発達障害の中の研究が進み、その中で「アスペルガー症候群」(ASD)は、職場関係・家族関係の主な対人ネットワークを損ねやすい特徴をもっているとして話題になっていた。

ある日気付いてみると、夫の書類、蔵書の段ボール箱、レコード、絵などの収集癖。

それだけでなく夫は整理整頓が出来ない性状で、直子は、啞然として、夫のコレクション癖を批判するようになっていた。相反する直子の性格は、夫と拮抗し、喧嘩が絶えなくなっていた。そのあげく夫は直子を敵対し、暴言・暴力を振るう、という悲惨な生活に陥っていた。

保健師である直子は、夫の現症に不安をもって専門医に相談する。その結果、夫の暴言・暴力は「ASD」の顕著なこだわりだと教えられた。

夫のASDを、どう理解し共同生活を保持するか、これは彼女にとって大きなテーマである。

「高円寺の家」と「小田急沿線」2編の作品はどちらも家庭内暴力を扱ったストーリーである。しかし、2編の、暴力メカニズムが異なると、著者は、思っている。

「高円寺の家」は、暴力する意思があり、自覚している。しかし「小田急沿線」ASDの暴力は自覚がないので、抑制が利かない、衝動的に起こる、暴言・暴力である。

これら2編の内容に連続性をもたせることもできた

ので、一冊の本として発刊できるまでにこぎつけられた。

やっと、まとまって、出版社から初校が届いたのが、この6月半ばである。しかし、特異的な作品だと思っ
てはいたが、原稿においては走りすぎ、または考察が
足らないなど書き直さなければならぬところが目立
ち、かなり初校に手間取った。最終的にはそれでも1
か月という長い時間を費やし、やっと認印を押して出
版社へ返送できたのが、7月13日である次の2校は、
8月になるでしょう、その折にはまた同じように苦し
むかもしれないが、夫の暴力を扱った作品は、著者の
経験が元になっているので、いつか出版したいと願っ
ていたもので、それだけでなく、今の時代にマッチし
ているのではないかと自負し、さらに自分を励まし、
そして本にするという課題意識を絶やさずに持ち続け
ていくつもりである。

「高円寺の家(仮称)」(株式会社文芸社)というタ
イトルの発売は10月15日を予定している。せめて素敵
な表紙と編集力に委ね、念願だった家庭暴力を問題提
起した作品が出版できる果報に浸っている著者である。

〈2019年9月1日〉

文学談話のできるボーイフレンドが欲しい

テレビに誘発されたせいかな、夫を亡くした高齢者の
恋を書きたくなつた。そんな折、アメリカの番組、ル
ポタージュされた「高齢者の恋」を見た。

これは、夫を失った女性が、自分に注目してくれる
人が欲しいという、明るいタッチのラブの追及だ。き
つとアメリカ流でなければできない番組であろう、こ
のようなものが日本では絶対にというほど作れない。
70歳過ぎた未亡人が「淋しい、自分に注目してくれる
男性が欲しい」などとのたまうと、八つ裂きにされそ
う、それとも、「いい加減にしなさい」と子どもたち
から叱られそうだ。

しかし、彼女は、夫の死後半年間我慢してきたが、
どうしても寂しいので、恋人を求める、ICへ「恋人
が欲しい」というメールを送った。出会い系のサイト
には、多くの高齢者が恋人を求める依頼が入っていて、
73歳の彼女の依頼など、特別ではなかった。結婚は
したくないけど「付き合いたい」系の出会いでニーズ
は高く、彼女は何人もの男性を紹介され、会って行く。

なかなか彼女が求める男性が見つからない。

なぜ、見つからないかというと、彼女は、セックスは求めないで、ただ、自分に関心を持ってほしい、話し相手、旅行、趣味の相手を求めているからだ。このような依頼者がたくさんあったらしいが、男性は、必ずセクシャリティーを欲している女性が多く、ピュアな女性への関心は少ない。

だからかなり難関だったが、5人付き合っているうちに、性格的にもマッチする人が見つかった。セクシヤリティーを求めない関係というのは彼女にとっては重大なことで、男性は必ずというほどセクシヤリティーを求めた。さらに自分の性格にマッチする優しさを求めることで、その上、いつも気にかけてくれる人というのは、かなり贅沢らしい。しかし彼女は、数回デートしながら好みの人、2歳年下の人と出会った、という。

夫をなくしても、いつも声をかけてくれる、話できる人、という彼女のニーズに合う、素敵な出会いを得て、これからの人生が楽しくなったと言う。

これはアメリカナイズされたストーリーだと思う、自分に正直になれる出会いは私にも参考になった。男の人はややもすると「会話の楽しさを、(趣味を含む)」

などは度外視して、いつも、セクシヤリティーを求める人が多い、それ故に高齢になるほど年の離れた若い女性を求める。その点、女性はもう男性にセクシヤリティーは求めない。しかし、ボーイフレンドが欲しいというニーズは持っている。

日本の女性も、男性と精神的に付き合いたいという人が多いと思う。このドキュメンタリーの中でナレーションが平気で「男性はいくつになってもセックス」を求める。女性も同じだと思ったら間違いだと言っている言葉が印象的であった。女性は男性と手をつなぐ、または抱擁はしたいと思うが、セックスはしたくないというのが本音である。

ここであえて言うと、夫のいる私ではあるが、創作に関心のあるボーイフレンドが欲しい、会話だけでもいいと、願っている気持ちは正直ある。

